

# 令和6年度 卒業生等アンケート結果の分析

人文学部・人文社会科学研究科

教育学部・教育学研究科

医学部医学科

医学部保健学科・保健学研究科

理工学部・理工学研究科

農学生命科学部・農学生命科学研究科

地域社会研究科

教養教育開発実践センター

## 【人文社会科学部（人文学部（旧カリキュラム）を含む）】

回収率が低く標本数が少ないが、今回の回答の分析結果は以下の通りである。なお、分析には人文社会科学部卒業生（48名）と人文学部卒業生（4名）が含まれる。

進路について

問 3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

「希望どおり」「大体希望どおり」が52%であり、過半数の回答者が希望どおりに進路選択できていることがわかる。これに、「希望どおりではないが満足している」の33%を加えると8割以上が進路選択について満足している。

II 本学在学中の教育や学生支援について

問 4 教育内容に、全体として満足でしたか。

「満足」「どちらかといえば満足」が81%であり、R5調査より10%低くなっている。他方、「不満」「どちらかといえば不満」は6%である。全体としては高い満足度が得られていると考えられる。

問 5 学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

「十分」「不足していたが学習や研究はできた」が93%であり、R5調査より20%上昇している。なお、「不十分で学習や研究がやりにくかった・できなかった」という否定的な回答は0%であり、R5調査から大きく改善している。今後も継続的な改善が望まれる。

問 6 課外活動に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

「十分」「不足していたが課外活動はできた」が79%であり、R5調査（60%）から大きく改善している。ただし、「不十分で課外活動がやりにくかった」というやや否定的な回答は6%であり、R調査5（7%）に比べてあまり改善していない。

問 7 就職活動への支援は十分でしたか。

「十分」「不足していたが就職活動に問題はなかった」が81%であり、R5結果（63%）から大きく改善している。他方、「不十分で就職活動に苦労した」は4%であり、R5（7%）から半減している。前回から大きく改善しているものの、就職活動に対応できていない者が少なからず存在している可能性があり、引き続き改善が望まれると考えられる。

III 学生生活で感じたこと、身に付いたと思うことについて

問 8 学位授与方針の中での①～④それぞれについて身に付いたと思われませんか。

学際的な教養と高度な専門性（①）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が73%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は14%である。自然や社会を見通す力（②）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が81%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は4%である。国際社会や地域社会の問題を解決していく力（③）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が65%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は0%である。学び続ける力（④）については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が81%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」は2%である。

学位授与方針で掲げられている知識や資質が身に付いたか、ということについては総じて肯定的な回答が多い。ただし、学際的な教養と高度な専門性（①）についてはやや否定的な意見が10%を超えており、改善が望まれると考えられる。

問 9 教養教育科目で掲げられる到達目標は身についたか。

主体的・能動的学修態度(①)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が73%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は10%である。多元的な視点や思考法(②)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が86%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は4%である。英語能力(③)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が43%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は42%である。地域志向性(④)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が89%であり、「身に付かなかった」は4%である。国際性(⑤)については、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が48%であり、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」は29%である。

主体的・能動的学修態度(①)・多元的な視点や思考法(②)・地域志向性(③)については肯定的な回答が多い。一方、英語能力(③)・国際性(⑤)については肯定的な意見はそれぞれ半数以下であり、かつ、否定的な意見が多いため改善が必要であると考えられる。

問 10 仕事に関わることで、大学で学んだこと・経験が役に立っているか。

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者は、「学際的な教養・高度な専門性」(①)で54%、「学術的な観点から自然や社会を見通す力」(②)で67%、「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」(③)で44%、「学び続ける力」(④)で79%である。他方、「あまり役に立っていない」「役に立っていない」と否定的な回答は①で16%、②で12%、③で14%、④で6%である。

以上から、肯定的な意見に比べて否定的な回答は多くはなつたと考えられる。なお、③を除いて相対的には満足している回答が半数は越えているものの、高い満足水準であるとは言えない。今後更なる改善が求められている。

問 11 仕事以外の生活の中で、大学で学んだこと・経験が役に立っているか。

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者は、「学際的な教養・高度な専門性」(①)で54%、「学術的な観点から自然や社会を見通す力」(②)で67%、「学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」(③)で44%、「学び続ける力」(④)で79%である。他方、「あまり役に立っていない」「役に立っていない」と否定的な回答は①で16%、②で12%、③で14%、④で6%である。

③を除いて相対的には満足している回答が半数は越えているものの、高い満足水準であるとは言えない。今後更なる改善が求められている。

なお、回答分布が問 10 とまったく同じであり、設問の内容・表現に関して工夫・検討が必要であると考えられる。

IV 在学生のため、今後の教育や学生支援に必要と思われること

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか(複数回答可)。

教育の充実に関して、さまざまな項目での充実が望ましいと回答されている。特に、半数以上が挙げているのは、情報収集力(60%)、論理的思考力(54%)、コミュニケーション力(71%)である。今後の学部教育改善の参考にしたい。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を充実させることが望ましいか(複数回答可)。

教育以外の支援に関して半数以上が挙げている項目は、研究室・ゼミナール活動(65%)、インターンシップ(54%)である。引き続き支援の内容等の改善を図りたい。

問 14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか。

選択肢としては、「資格修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」(48%)と「必ずしも仕事・職業とは関係ないことを広く教養として学ぶ機会」(37%)が相対的に多かった。今後の教育改善の参考にしたい。

## 【人文社会科学研究科】

回収率が低く標本数は少ない(2名)が、今回の回答の分析結果は以下の通りである。

### 進路について

問 3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

「大体希望どおり」2名であり、進路選択に満足していることがわかる。

### II 本学在学中の教育や学生支援について

問 4 教育内容に、全体として満足でしたか。

「満足」1名、「不満」1名である。内容の改善が必要であると考えられる。

問 5 学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

「十分」「不足していたが学習や研究はできた」が各1名であり、施設・設備・備品については満足していることがわかる。

問 6 課外活動に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

「十分」「不足していたが課外活動はできた」が各1名であり、施設・設備・備品については満足していることがわかる。

問 7 就職活動への支援は十分でしたか。

「十分」が1名、「不十分で就職活動ができなかった」が1名である。就職活動に対応できていない者への対応が必要であると考えられる。

### III 学生生活で感じたこと、身に付いたと思うことについて

問 8 学位授与方針の中での①～④それぞれについて身に付いたと思われませんか。

学際的な教養と高度な専門性(①)については、「身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。自然や社会を見通す力(②)については、「身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。国際社会や地域社会の問題を解決していく力(③)については、「どちらかといえば身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。学び続ける力(④)については、「どちらかといえば身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。

学位授与方針で掲げられている知識や資質が身に付いたか、ということについては総じて肯定的な回答が多いものの100%というわけではなく、改善が望まれると考えられる。

問 9 教養教育科目で掲げられる到達目標は身についたか。

主体的・能動的学修態度(①)については、「どちらかといえば身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。多元的な視点や思考法(②)については、「どちらかといえば身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。英語能力(③)については、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」が各1名である。地域志向性(④)については、「どちらかといえば身に付いた」が1名であり、「一概に言えない」が1名である。国際性(⑤)については、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」が各1名である。

主体的・能動的学修態度(①)・多元的な視点や思考法(②)・地域志向性(③)については肯定的な回

答が多い。一方、英語能力(③)・国際性(⑤)については肯定的な意見は無く否定的な意見のみであり、改善が必要であると考えられる。

問 10 仕事に関わることで、大学で学んだこと・経験が役に立っているか。

“学際的な教養・高度な専門性”(①)について、「役に立っている」が1名、「役に立っていない」が1名である。“学術的な観点から自然や社会を見通す力”(②)について、「役に立っている」が1名、「一概に言えない」が1名である。“学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力”(③)について、「一概に言えない」が2名である。“学び続ける力”(④)について、「役に立っている」が1名、「一概に言えない」が1名である。

①～④の観点について、相対的に高い満足水準であるとは言えない。特に、“学際的な教養・高度な専門性”(①)については今後更なる改善が求められる。

問 11 仕事以外の生活の中で、大学で学んだこと・経験が役に立っているか。

“学際的な教養・高度な専門性”(①)について、「役に立っている」が1名、「役に立っていない」が1名である。“学術的な観点から自然や社会を見通す力”(②)について、「役に立っている」が1名、「一概に言えない」が1名である。“学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力”(③)について、「一概に言えない」が2名である。“学び続ける力”(④)について、「役に立っている」が1名、「一概に言えない」が1名である。

①～④の観点について、相対的に高い満足水準であるとは言えない。特に、“学際的な教養・高度な専門性”(①)については今後更なる改善が求められる。

なお、回答分布が問 10 とまったく同じであり、設問の内容・表現に関して工夫・検討が必要であると考えられる。

IV 在学生のため、今後の教育や学生支援に必要と思われること

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか(複数回答可)。

教育の充実に関して、さまざまな項目での充実が望ましいと回答されている。具体的には、基礎的知能・技能(1名)、情報収集力(1名)、コミュニケーション力(2名)、課題探求能力(1名)である。今後の教育改善の参考にしたい。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を充実させることが望ましいか(複数回答可)。

教育以外の支援に関して挙げている項目は、キャリア教育(2名)、ボランティア活動(1名)、アルバイト(1名)である。引き続き支援の内容等の改善を図りたい。

問 14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか。

選択肢としては、「技術的知識ではない広い知識を、職業人としての実力を磨くために学ぶ機会」(1名)と「必ずしも仕事・職業とは関係ないことを広く教養として学ぶ機会」(1名)が挙げられている。今後の教育改善の参考にしたい。

## 【教育学部】

回答率が低いため、今回の結果で以って教育学部卒業生の総意にはならないことに留意しなければならない。その一方で、積極的に調査にご協力いただいた卒業生の意見として、以下、各設問の結果について述べることとする。

### 問4

教育内容について、回答者全員が「満足」「どちらかと言えば満足」と回答していたことから、満足していたと考えられる。

### 問5

学習や研究に関わる施設・設備・備品について「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」の合計は90%であり、前回調査（令和5年度）の79%を上回っている。「不十分で学習や研究がやりにくかった」「不十分で学習や研究ができなかった」との回答はなかったが、施設・設備・備品については更新が必要なものもあり、随時現状確認を行い、また学生教職員連絡協議会等の場で意見交換を図りながらさらなる改善に努める。

### 問7

就職活動への支援について「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」の合計は77%で、前回調査（令和5年度、68%）を上回った。これは教職への就職支援を充実させた取り組みに、一定の評価が得られていることを確認できる。一方で「不十分で就職活動に苦労した」「不十分で就職活動ができなかった」の合計が7%となっており、その具体的な内容について精査したうえではあるが、場合によっては弘前大学教育推進機構キャリアセンターとの連携を図っていく必要があるのかもしれない。

### 問8

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の全ての項目において「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の合計は70%を超えていた。対して「身に付かなかった」「どちらかといえば身に付かなかった」の合計は10%に満たず、回答者は、概ね身に付いたと考えていることが窺われる。

### 問10

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け生涯に

わたくし自らを成長させていく学び続ける力、の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、それぞれ①90%（昨年度 63%）、②77%（同 68%）、③67%（同 53%）、④83%（同 74%）となっている。いずれの項目とも全学の平均値を上回っているが、③については他の項目と比べて低い数値となっており、教育課程の改善を図りながらその向上に向けた取り組みを行う必要がある。

#### 問 11

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、それぞれ①90%（昨年度 40%台）、②77%（同約 60%）、③67%（同 40%台）、④83%（同約 80%）となり、昨年度の結果と比較して概ね向上している。教育学部のカリキュラムは、教員養成を目指すものであるが、生涯学習能力を含めた日常生活に対する有用性についても肯定的に捉えて良いと評価できる。

#### 問 12

「12.その他」を除く全ての項目で 12～19 点の回答数がみられた。回答者は全ての項目が社会人として教員として必要なスキルだと感じているのであろう。なかでも「5.コミュニケーション力(19点)」は、回答者が社会に出てその必要性を痛感していることではないだろうか。今回の結果は、学部の先輩方からの重要な示唆として、今後の教育活動に活かしていきたい。

#### 問 13

複数回答のなかで、上位 3 つの選択肢は、順に「4.研究室・ゼミナールの活動(17点)」「5.キャリア教育(11点)」「8.地域貢献活動(10点)」であった。この結果は、各教員が専門分野を活かした魅力的な教育コンテンツを学生に提供していたことを示唆している。その一方、他の選択肢も満遍なく回答が見られたことから、多様なニーズがあることを認識したうえで今後の学生支援の充実を図る。

#### 問 14

「1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」「2. 技術的知識ではない広い知識を職業人としての実力を磨くために学ぶ機会」の占める割合が 77%となり、その一方で「必ずしも仕事・職業とは関係ないことを広く教養として学ぶ機会」が 17%となっている。前者は今後既卒者に対するキャリア向上のための研修の充実といった取り組みの必要性を示していると捉えられる。後者は、大学が単なる職業訓練にとどまらない教養知を提供することの意義を示唆していると考えられる。

問 15

教育学部のカリキュラム等に言及した意見はなかったものの、今後の教育活動の参考にしていきたい。

**【教育学研究科】**

・今回のアンケート調査の対象である令和2年度修了生の回答者数は、教職実践専攻8名、学校教育専攻1名、教科教育専攻2名であった。

問 3

「希望どおり」「大体希望どおり」が約90%であり、「希望どおりではないが満足している」が1名であるので、入学時に希望していた進路に進めていることが伺える。

問 4

「満足だった」「どちらかといえば満足だった」が約90%であり、十分教育内容について肯定的に捉えられていたと考えられる。なお、「どちらかといえば不満足だった」は1名であったが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 5

「十分だった」「不足していたが課外活動はできた」が約90%であり、十分設備、備品については肯定的に捉えてよいと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 6

「十分だった」「不足していたが課外活動はできた」が約72%であり、概ね設備、備品については肯定的に捉えてよいと考えられる。なお、2名が「一概に言えない」、1名が「不十分で課外活動がやりにくかった」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 7

「十分だった」「不足していたが就職活動には問題なかった」が約72%であり、就職支援については概ね達成していたと考えられる。なお、3名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 8①

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 8②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 8③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約81%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、2名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因につ



いては明らかにできない。

問8④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問9①

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約45%であり、「一概に言えない」が3名、「身に付かなかった」が3名であったため達成させることができていないと考えられる。一方で教育学研究科教職実践専攻の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、英語教育は重視されていない実情にあることは否めない。

問9④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問9⑤

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約27%であり、「一概に言えない」が6名、「身に付かなかった」が2名であったため達成させることができていないと考えられる。一方で教育学研究科教職実践専攻の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、国際性については重視されていない実情にあることは否めない。

問10①

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問10②

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問10③

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約72%であり、概ね達成させることができたと考えら

れる。なお、2名が「一概に言えない」、1名が「あまり役に立っていない」、と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

#### 問 10④

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約 81%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、2名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

#### 問 11①

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約 90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

#### 問 11②

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約 90%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、1名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

#### 問 11③

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約 72%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお2名が「一概に言えない」、1名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

#### 問 11④

「非常に役に立っている」「役に立っている」が約 81%であり、十分達成させることができたと考えられる。なお、2名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

#### 問 12

教職実践専攻において、これまでも教職についての専門的知識・技能及びコミュニケーション力の育成のために教員が一丸となって努力してきたが、今後も一層の努力をしていく。

#### 問 13

「インターンシップ」について、教職実践専攻では実習科目群と考えられ、この科目群についてはかなり充実をしていると考えている

#### 問 14

「1」については、教職実践専攻は教員免許について専修免許状の資格を習得でき、また教職についての専門性を学ぶ機関であり、さらにこれまでの回答の様子を踏まえると、ここでの回答は教職実践専攻への期待というよりは本学の全学部での学びを考えていると思われる。

## 【医学部医学科】

今回、調査対象となった令和2年度卒業生に対して、回答が6件のみであり、また、すべての設問について「不十分」「身に付かなかった」と回答している方が2名いたため、今回の回答がすべての卒業生の傾向であるとは言えないものの、以下のとおり分析した。

仕事に関わること（問10）、および仕事以外の日常生活（問11）において、大学で学んだことや経験のうち「学際的な教養と高度な専門性」については、「非常に役に立っている」「役に立っている」と感じている人の割合が半数以上となっている。この設問については、昨年度も同様に半数以上の卒業生が役に立っていると感じている部分であるため、大学での教育や経験については、卒業後も概ね有用なものを提供できていると感じている。

一方で、学習や研究に関わる施設・設備・備品の「十分だった・不足していたが学習や研究はできた」と回答した割合は、昨年度以前から引き続き同様に低い傾向にある（33%…2/6）。なお、以前からのアンケート結果および学生からの要望もあり、2024年度からは、学生支援センター1号棟における学生実習室の利用可能時間について、コロナ禍により18時まで短縮していたところを21時まで延長した。2023年度にも基礎校舎地階に学生実習室（2部屋・計40席）を設置したため、数年後には同設問に対する回答について良化していくことが期待されるが、引き続き施設・設備・備品を充実させる取組みを検討・実施していくことが求められているものと思われる。

また、在学生のために今後の教育や学生支援に必要と思われることとして、「論理的思考力」（66.7%…4/6）や「コミュニケーション力」（50%…3/6）、「専門的知識・技能」（50%…3/6）などが多く挙げられていた。医師として働くうえで、将来的に必要となる事項が求められていると考える。

また、それ以外の分野としては、海外留学についての支援を充実させることが望ましいという回答が多かった（62.5%…5/8）。引き続き、それぞれの事項について充実した教育・支援体制を構築することを検討・実施することが必要である。

## 【医学研究科】

今回、調査対象となった令和2年度修了生に対して、回答が3件のみであるため、今回の回答がすべての修了生の傾向であるとは言えないものの、以下のとおり分析した。

本学在学中の教育や学生支援のうち、教育内容（問4）については、全員が「満足だった・どちらかといえば満足だった」という回答であった。また、学修や研究に関わる施設・設備・備品（問5）についても、全員が「十分だった・不足していたが学習や研究はできた」という回答であった。このことから、概ね大学院での教育・研究については概ね肯定的に捉えられているものと見受けられる。また、その他の項目についても概ね肯定的な意見が多くを占めていた。

一方、仕事に関わること（問10）、および仕事以外の日常生活（問11）の各項目についても、概ね「非常に役に立っている」という回答であったが、「一概に言えない」といった回答も見受けられることから、医学研究科における研究から得られる経験を将来に役立てられるよう、さらに検討・改善していく必要がある。

## 【医学部保健学科・保健学研究科】

医学部保健学科 44 名、保健学研究科 3 名（前期課程のみ回答）、計 47 名の分析を行いました。

### ・問 2、問 3 現在の職業と進路の一致

87%が「医療・福祉」もしくは自治体の医療部門に就いており、94%が入学時に希望していた進路と一致もしくは大体希望通りとなっていた。

### ・問 4 教育内容に関する満足度

「不満足だった」0名、「どちらかと言えば不満足」2名、「一概に言えない」6名であり、他の約38名、約80%はほぼ満足していた。

### ・問 5 学習や教育に関わる施設・設備・備品の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は80%であり、「一概に言えない」が8名だった。他学部の平均とほぼ同じ満足度であった。

### ・問 6 課外活動の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は74%であり、昨年の64.3%より高かった。

### ・問 7 就職活動への支援に関する満足度

「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」学生は78.7%であり、総計の71.4%とほぼ同様の満足度であった。

### ・問 8 学生生活で感じたこと、身についたと思うことについて

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせると、①「学際的な教養と高度な専門性」は89.3%と高く、総計を上回っていたが、身についたと断言したのは7名にとどまった。②「学際的観点から自然や社会を見通す力」は、74.5%で他学部と同様だった。③「学際的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」は63.8%とやや低く、それでも昨年の53.6%よりは上回っていた。④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」は、78.7%だった。

一般的に昨年の調査より、上回った評価を得ている。保健学科・保健学研究科が実施している医療・保健・福祉に関する専門性の高い教育は、比較的高い評価が得られたといえるが、十分身についたと実感しているのは少ない傾向だった。そのためこの結果は今後も課題となると考える。また、国際社会や地域社会の問題を解決していく力は、少し伸びた印象はあるが、まだ対応策としては不十分と思われる。

### ・問 9 教養科目について

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせて、①「主体的・能動的学習態度」78.7%と昨年の60.7%より高かった、②「多角的な視点や思考法」83.0%と昨年より10%強向上した。③「国際共通語としての英語能力」30.0%と⑤「国際性」は、42.6%と低く、国際性に伴い英語教育の充実が継続的に必要である。なお、④「地域志向性」は、66.0%と昨年が78.6%だったのに比べ、比較的低かった。他の項目に比べ、地域の持つ強みや魅力の再発見につながる教育が必要と思われる。

### ・問 10 仕事に関わることで、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「学際的な教養と高度な専門性」83.0%、

②「学術的観点から自然や社会を見通す力」70.2%、③「学際的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」66.0%、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」77.0%であり、いずれも昨年の比率とほぼ同様の割合であった。このなかで①「学際的な教養と高度な専門性」は高い状況だった。

・問 11 仕事以外の日常生活の中で、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「学際的な教養と高度な専門性」83.0%と昨年を大きく上回った（昨年 53.6%）、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」70.2%（昨年 50.0%）、③「学際的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」66.0%（昨年 46.6%）、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」77.0%、（昨年 60.7%）であり、いずれも昨年を上回った割合であった。

役立っている割合が、問 10 では昨年同様、問 11 では昨年より高くなっていたことから、仕事である医療・保健・福祉に関する学びは、高いレベルで身についた、役立っていると感じているようである。かつ、学術的な学びや、新規の課題に関する解決能力も、身につけてきていると感じているのではない。ただし、国際性については、留学や交換留学生なども勘案すると、まだまだ不足と考えられる。

・問 12 在学生のため支援が必要と思われること

「コミュニケーション力」が 31 名と回答が多かった。医療職に勤めることが多いことから、患者や利用者との会話能力が必要と回答したものが多かったのではないかと推測される。あと半数を超えたのは、専門知識と技能であり、社会に出てより専門性が求められる職種であることが予測される。また、海外での研修や学会発表などからも、英語力を含めたコミュニケーション力の支援を必要としていると考えられる。

・問 13 支援を充実させることが望ましい項目

半数以上を超えた項目はなく、そのなかで比較的多かったのは、「研究室・ゼミナールの活動」の 49%をはじめ、「キャリア教育」、「インターンシップ」であった。

・問 14 今後本学で学ぶ時の機会

人数が多かったのは、「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」53.2%であったそれでも半数程度にとどまっていた。その次の広く教養として学ぶ機会が 40.4%でそれ以外は、1 名程度にとどまっている。

・問 15 大学の教育や学生支援サービス向上のための意見

保健学科、保健学研究科では意見があがらなかった。

## 【理工学部・理工学研究科】

### 問1 回答件数

学部卒が 65 件 (R4 年度 45 件, R3 年度 20 件)、院卒が 24 件 (R4 年度 18 件, R3 年度 16 件) であった。ここ数年来、回答件数は順当に増加し、定員数 (学部 360 名, 大学院 120 名として計算) から大まかに見積もると、回収率は 20%程度となっている。引き続きこのペースで回収率が向上していくことが望まれる。

### 問2 回答者の職業？

学部卒 ; 1 位「製造業」34%, 2 位「情報通信業」18%

院卒 ; 1 位「製造業」54%, 2 位「情報通信業」21%

「製造業」、「情報通信業」が大半を占めている。院卒でその傾向はより顕著に見られる。

### 問3 入学時の希望通りの進路に進んでいるかどうか？

(総回答数 (学部卒 65, 院卒 24) のうち、下記選択肢への回答数の割合を示す。左側の数値が学部卒、右側が院卒。数値の丸め込みの関係上、総和が 100%とならない場合があることについて、あらかじめご了承ください。以下、特に断りのない限り同様。)

「希望どおり」23%, 13%

「大体希望どおり」40%, 54%

「希望通りではないが満足している」26%, 25%

「希望通りではなく満足していない」2%, 0%

「希望する進路がなかった」9%, 8%

満足との回答が大半を占めている。

### 問4 教育内容は全体的に満足であったか？

「満足だった」22%, 21%

「どちらかといえば満足だった」54%, 50%

「一概に言えない」22%, 25%

「どちらかといえば不満足だった」3%, 4%

「不満足だった」0%, 0%

肯定的回答が学部卒・大学院卒ともに 7 割を超えた。

### 問5 学習や研究に関わる施設などは十分であったか？

「十分だった」37%, 29%

「不足していたが学習や研究はできた」43%, 33%

「一概に言えない」18%, 29%

「不十分で学習や研究がやりにくかった」2%, 4%

「不十分で学習や研究ができなかった」0%, 4%

学部卒では肯定的回答が 8 割となったが、院卒では 6 割程度に抑えられた。大学院生のほうがより深く研究に従事するため、設備などへの不備に気付く機会が多くなることが理由のひとつとして推察される。

### 問6 課外活動に関わる施設などは十分であったか？

「十分だった」42%, 29%

「不足していたが課外活動はできた」22%, 13%

「一概に言えない」31%, 50%

「不十分で課外活動がやりにくかった」6%, 6%

「不十分で課外活動ができなかった」 0%, 0%

学部卒では肯定的意見が 6 割を超えたが、院卒では「一概には言えない」や「不十分」とする回答が半数を超えた。

問 7 就職支援に関する支援は十分であったか？

「十分だった」 42%, 46%

「不足していたが就職活動に問題はなかった」 26%, 17%

「一概には言えない」 28%, 33%

「不十分で就職活動に苦労した」 5%, 4%

「就職活動ができなかった」 0%, 0%

学部卒では肯定的回答が 7 割、院卒では 6 割強となっている。

問 8 学位授与方針の中で掲げられている知識や資質がどれだけ身についたか？

(項目①～④に対する延べ総回答数(学部卒 260,院卒 96)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「身についた」 22%, 20%

「どちらかといえば身についた」 45%, 46%

「一概には言えない」 19%, 19%

「どちらかといえば身につかなかった」 12%, 11%

「身につかなかった」 3%, 4%

学部卒、院卒ともに肯定的な回答が 6 割 5 分程度となっている。

問 9 教養教育科目で到達目標としている知識・学力は身についたか？

(項目①～⑤に対する延べ総回答数(学部卒 325,院卒 120)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「身についた」 15%, 19%

「どちらかといえば身についた」 34%, 32%

「一概には言えない」 26%, 18%

「どちらかといえば身につかなかった」 16%, 23%

「身につかなかった」 9%, 8%

学部卒、院卒ともに肯定的な回答が 5 割程度となっている。項目③の英語能力、ならびに項目⑤の国際力で否定的な回答が目立った。

問 10 大学で学んだことや経験が仕事で役に立っているか？

(項目①～④に対する延べ総回答数(学部卒 260,院卒 96)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「非常に役に立っている」 16%, 20%

「役に立っている」 42%, 41%

「一概には言えない」 23%, 22%

「あまり役に立っていない」 14%, 15%

「役に立っていない」 5%, 3%

学部卒、院卒ともに肯定的回答が 6 割前後となっている。

問 11 大学で学んだことや経験が仕事以外で役に立っているか？

(項目①～④に対する延べ総回答数(学部卒 260,院卒 96)のうち、下記選択肢への平均回答数割合を算

出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「非常に役に立っている」 16%, 20%

「役に立っている」 42%, 41%

「一概に言えない」 23%, 22%

「あまり役に立っていない」 14%, 15%

「役に立っていない」 5%, 3%

学部卒、院卒ともに肯定的回答が 6 割前後となっている。

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか（複数選択可）？

（延べ総回答数（学部 275,院 123）のうち、選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋）

学部卒；

1 位「コミュカ」 13%, 2 位「自己管理力」 12%, 3 位「情報収集力」 11%

院卒；

1 位「情報収集力」 12%, 2 位（同率）「論理的思考力」, 「コミュカ」, 「課題探究能力」, 「問題解決力」 11%

学部卒、院卒ともに「情報収集力」が上位に入っている。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を今後充実させればいいのか（複数選択可）？

（延べ総回答数（学部 166,院 70）のうち、選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋）

学部卒；

1 位「研究室・ゼミ活動」 22%, 2 位「インターンシップ」 19%, 「キャリア教育」 17%

院卒；

1 位「研究室・ゼミ活動」 22%, 2 位「インターンシップ」 16%, 「キャリア教育」 14%

学部卒・院卒ともに「研究室・ゼミ活動」, 「インターンシップ」, 「キャリア教育」の充実を挙げている。

問 14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか？

（総回答数（学部卒 65,院卒 24）のうち選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋）

学部；

1 位（同率）「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」 32%,

1 位（同率）「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」 32%

3 位「技術的知識ではない広い教養を職業人としての実力をつけるために学ぶ」 22%

研究科；

1 位「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」 63%,

2 位「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」 25%,

3 位「学ぶ機会ということでは特に希望することはない」 8%

学部卒・院卒ともに「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」, 「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」とする回答が大半を占めたが、院卒の方がより「技術的・専門的知識」を望む声が多い。



## 【農学生命科学部・農学生命科学研究科】

令和6年度「卒業生等・企業等アンケート調査」は、令和2年度の卒業生等（卒業・修了3年後）に対して行われたものである。このうち、農学生命科学部（以下、農生学部）および農学生命科学研究科（以下、農生院）でみられた特徴的な回答について概要を説明する。

問3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

「希望どおり」と「大体希望どおり」を合わせた肯定的回答は、農生学部で59.5%、農生院で46.2%であり、全学部・全研究科（以下、全学）の68.5%よりも低い値であった。同様の傾向は昨年度の結果にもみられた。「希望どおりではなく満足していない」と「希望する進路がなかった」を合わせた否定的回答がそれほど多くなかったことからすると（農生学部9.5%、農生院7.7%、全学8.7%）、肯定的回答が少ないことの原因については留意する必要があるものの、入学後の勉学を進めるなかでより適切な進路を見出しているものと推測される。

問4 教育内容に、全体として満足でしたか。

「満足だった」と「どちらかといえば満足だった」を合わせた肯定的回答は、農生学部で83.3%、農生院で84.6%と、全学の80.9%に比べて高い傾向にあった。昨年度、全学（78.1%）に比べて農生学部（76.2%）および農生院（71.4%）とも、教育内容に関する満足度がやや低かったこととは対照的な結果となった。

問7 就職活動への支援は十分でしたか。

「十分だった」と「不足していたが就職活動に問題はなかった」を合わせた肯定的回答は、全学および農生学部でそれぞれ71.5%、71.4%と同程度であった。しかし、「不十分で就職活動に苦労した」と「不十分で就職活動ができなかった」の否定的回答については、全学で5.4%であったのに対し、農生学部で11.9%と大きく上回った。前年度にこのような傾向はみられなかったことから、今後のデータを注視していく必要があると思われる。

問8 弘前大学では、次の①から④に掲げる知識や資質を身に付けた学生に対して、学位を授与する旨の方針を明確にしました。それらは身に付いたと思われませんか。

「①学際的な教養と高度な専門性」については、農生学部（90.5%）および農生院（92.3%）ともに全学（80.5%）に比べ肯定的回答が多かった。

一方で、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」については、農生学部（54.8%）および農生院（30.8%）とも全学（58.1%）に比べ肯定的回答が少なかった。これについては、前年度も同様の結果がみられた。さらに、「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」についても、農生学部で肯定的回答は71.4%（全学76.8%）、否定的回答は11.9%（全学7.0%）であり、「学び続ける力」が身に付いたと感じる学部学生は少ない傾向にあった。対照的に農生院では92.3%が肯定的回答をしており、この傾向は前年度にもみられた。

問10 特に仕事に関わることで、大学で学んだことや、経験が役に立っていると感じますか。

「①学際的な教養と高度な専門性」について、肯定的回答は全学（68.5%）に比べ、農生学部（61.9%）および農生院（61.5%）とやや低く、また否定的回答も全学（14.1%）に比べ農生学部（26.2%）で高い結果となった（農生院では0%）。この傾向は昨年度もみられた。同様に、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」に対する肯定的回答も全学（49.7%）に比べ、農生学部（47.6%）および農生院（38.5%）でやや低い傾向にあり、否定的回答も全学（18.8%）に比べ農生学部（31.0%）では高い結果となった。今後の経過を注視していく必要があると思われる。

一方で、「②学術的観点から自然や社会を見通す力」についての肯定的回答は、全学（68.1%）に比べ、

農生学部（73.8%）および農生院（92.3%）で高い傾向にあった。

以上の傾向は「問 11 仕事以外の日常生活の中で、大学で学んだことや、経験が役に立っていると感ずるか。」についてもみられた。

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいですか。

昨年度は農生学部、農生院、全学ともに「5. コミュニケーション力」、「11. 問題解決力」、「4. 論理的思考力」を選択する傾向がみられたが、今年度はこれに加え、「10. 課題探求能力」や「3. 情報収集力」も上位を占めた。

問 15 上記以外で、大学における教育や学生支援サービス向上のために、ご意見がありましたらお聞かせください。

「修士課程にある研究方法論を学部 4 年生にも教えてはどうでしょうか（農生学部）。」と「青森という深い文化に触れあえる機会、国立大学という特性を生かした多様な専門教育、地域還元性を今後も目指して欲しい（農生院）。」とのコメントがあった。

これら本学部・研究科にみられる特徴について学部内で情報共有し、教育改善の参考としたい。

## 【地域社会研究科】

本研究科の回答数が3名であるため一概には言えないが、以下のとおり分析した。

- ・在学中における教育内容（問4）については「満足だった」「どちらかといえば満足だった」、学習や研究に関わる施設、設備、備品（問5）については「十分だった」という回答であったことから、本研究科の教育課程や研究環境は、高く評価されていると考える。
- ・就職先・進学先（問3）については「希望どおり」「大体希望どおり」であったが、就職活動への支援（問7）については「一概には言えない」という回答もみられたことから、引き続きキャリアセンターの活用を促す等、効果的な支援策を検討していくこととする。
- ・本学が定めるディプロマ・ポリシー（問8）については、回答にばらつきが見られるものの、①～④の全ての項目において、身に付かなかったという回答はなかったことから、概ね十分な教育研究指導を行うことができたと考える。
- ・仕事や日常生活において、大学で学んだことや経験が役立っていると感じるかという設問（問10及び問11）については「非常に役立っている」もしくは「役立っている」という回答が大半であり、研究科での学びが卒業後に活用できていると思われる。一方で、「一概には言えない」という回答があったが、これについては学んだことと現在の仕事との関連もあるためこのような評価になったのではと考えている。
- ・今後望まれる教育内容（問12）として、「論理的思考力」「問題解決力」等があげられたことから、教育課程や教育内容の改善に反映することを検討したい。

## 【教養教育開発実践センター】

### 問9

全卒業生 1,429 名に対し、298 名の回答は回答率 21%程度に相当する。これは過去 2 年間の回答率（令和 5 年度 13%、令和 4 年度 10%）と比較して大幅に増加しているが、依然として 2 割程度に留まっているため、この傾向を安易に一般化することは適切ではない。そのうえで回答結果を分析すると、以下の各項目で「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の割合が比較的高い結果となった。①「主体的・能動的な学習態度」は 72%、②「多元的な視点や思考法」は 83%、④「地域志向性」は 68%であり、いずれも良好な水準である。これらについては、教育目標が概ね達成されていると評価できる。一方で、③「国際共通語としての英語能力」は 31%、⑤「国際性」は 36%に留まり、それぞれ約 3 割が「一概に言えない」と回答している。この結果は、これらの分野にさらなる改善の余地があることを示唆している。なお、③および⑤に関連して、令和 4 年度には教養教育の英語科目で大規模なカリキュラム改訂を実施した。今後、この改訂の成果について詳細な検証を進める予定である。